亀岡吟行句会２０２６１１０８

11点句

能舞台切戸に覗く冬の翳（かげ）　宮本こぼ

特選　よし・太陽・和田桃・疾風
並選　富野香衣・にこぐさ・うつぼ

特選

私の説明とひんやりとした冬の様子を上手く表現してくださっています。（よし）

とても詠みたかった切戸からの視点。薄い光を詠みたかったのだが上手く出来ず諦めた。このように翳を持ってくれば薄明りも見えることを気付かせてくれた一句。勉強なりました！（太陽）

能舞台の裏方をみたのは初めてでした。小さな入り口から見た舞台は広々と、しっとりと冬のかげりがありました。人（和田桃）

能という伝統芸能の様式美と、冬という自然の様式美が、切戸と言う細部の一点が結びついた佳句です。（疾風）

並選

能舞台のハレの場所と切戸からの冬の翳との対比がよく響いています。（富野香衣）

切戸から舞台への眺めは磨き上げられた床に大きな松でした。床の艶には冬の厳しさに通じるものがあると思いました。（にこぐさ）

能舞台も冷たい風が吹いてきてるのでしょうか？（うつぼ）

10点句

落ち葉踏むへちま先生声高し　よし

特選　石黒
並選　へちま・和田桃・宮本こぼ・洋子・不染・泰干・太陽・孝
選外　富野香衣

特選

なんと言っても今日の主役のへちま先生。ありがとうございました。（石黒）

並選

これは取らんわけにはいかんやろ（へちま）

テンポ良く城内を案内してくれまひた。感謝の句ですね。（和田桃）

今日はありがとうございました（宮本こぼ）

へちまさん、いろいろお世話になりありがとうございました！　声高く誇らしげに案内されているのが印象的でした。（洋子）

お世話様でした（不染）

へちま先生ちょっと嬉しいんですかねー（太陽）

頑張って下さいました（孝）

選外

へちまさんの張り上げた声、高ぶった表情が見えます。（富野香衣）

9点句

石垣は城の語り部石蕗の花　不染

特選　美也子・一途
並選　清史・和田桃・にこぐさ・石黒・秋霜

特選

石は何も語らないがあるだけで何時の時代か誰が造ったかなど歴史が分かる。季語の石蕗の黄色が色を添えていて良い。（美也子）

石垣が語る歴史に、素朴な花の様子が際立っています、　（一途）

並選

語り部俳句は見かけますが、へちまさんの石垣への説明に力がありました。（和田桃）

彩りの少ない季節の庭に一際明るい色があちらこちらに見られました。語り部にふさわしい花だと思いました。　（にこぐさ）

歴史を重ねてきた石垣と綺麗に咲いている石蕗の花の取り合わせがいいと思いました。　（石黒）

石蕗の花が、要所要所に見事に咲いていた。　（秋霜）

8点句

明智には明智の正義虫嗄るる　富野香衣

特選　にこぐさ・秋霜・藤岡
並選　よし・へちま

特選

とてもインパクトのある句でひきつけられました。歴史について17文字でこれほどたくさん語る事が出来るという事にも感動しました。　（にこぐさ）

今日の吟行の核心を尽く句。忘れられない句となった。　（秋霜）

明智もリチャード三世も。敗者には言いたいことがあろうが言えない。虫の声のすがるるさまに重なる。まことに悲痛な句である。　（藤岡）

並選

最近、明智も見直されているという話をしていたのでタイムリーでした。　（よし）

光秀が見直されています　為政者はそれまでの歴史をみんな悪役にします　真実は風の中　（へちま）

5点句

城垣の鑿（のみ）の歯形や石蕗日和　和田桃

並選　美也子・一途・洋子・不染・藤岡
選外　へちま

並選

のみ跡を歯形と表現されたのが面白くて良いなあと思った。　（美也子）

石蕗日和の季語の選択が良い　（不染）

鑿の歯形の発見を評価したい。石蕗の花の平和と相対して痛ましい戦のあとだ　（藤岡）

選外

ノミの後に　歴史と　人の存在を思います　ひとつ割ってはひと息　つわぶきより　（へちま）

腐葉土をふわり踏みゆく冬の園　和田桃

並選　美也子・不染・太陽・石黒・川崎
選外　へちま

並選

腐葉土の道がふわふわして歩いていて気持ちがよかった。　（美也子）

初めての体験でした。気持ち良かったです。　（不染）

冬の園が鑑賞者に任せる感じな気もしますが誰もがキレイな景色を浮かべるので勝ち。　（太陽）

ふわふわして気持ちよかったです。　（石黒）

植物園の、細やかな。案内、、良いです！　（川崎）

選外

私もあの柔らかさは句にしたかった　（へちま）

シテの息冴ゆる静寂鏡の間　洋子

特選　不染
並選　よし・へちま・石黒

特選

能に精通した作者の句。息冴ゆの措辞が素晴らしい。　（不染）

並選

能楽部時代を思い出しました…。緊張感と神聖な空間を上手く「息冴ゆる」で表現されていらっしゃいます。　（よし）

よしさんの句と思いますが　やはり実感があります　（へちま）

臨場感を呼び起こすようないい句だと思います。　（石黒）

足跡のまろみに冬日赤子石　太陽

特選　孝
並選　富野香衣・よし・洋子
選外　へちま

特選

まろみがいいですね　（孝）

並選

「まろみ」の言葉がこの句の中心だと思います。冬日の中にあたたかさを感じます。　（富野香衣）

かわいい天人の足跡をまろみと表現し、今日の解説にあった一句だと思いました。　（よし）

定食は冬の野菜の炊き合せ　美也子

並選　よし・へちま・宮本こぼ・太陽・藤岡

並選

かぼちゃが美味しかったですね　（よし）

これも吟行句の良さです　柔らかな冬の野菜が浮かびます　（へちま）

四百円は安い　（宮本こぼ）

ベジタルな定食でしたね。

この句も定食のように素朴ながら優しく美味しくできています。　（太陽）

少し高級そうな京都の炊き合わせに違いない。それが定食ときて、ガクッとするところ。　（藤岡）

4点句

温室に優しい声の中村さん　にこぐさ

特選　へちま
並選　宮本こぼ・一途
選外　和田桃

特選

吟行句の何たるかをしってるから出来る句です　（へちま）

並選

これも吟行句　ほんとに優しそうな中村さん　（宮本こぼ）

優しい案内の人が思い出されます、（一途）

選外

優しく説明してくださりました。　（和田桃）

秋光を集めて凛と能舞台　孝

並選　美也子・洋子・泰干・うつぼ

並選

能舞台の磨かれた床が凛としていると表現していて、その通りだと思った。（美也子）

立派な能舞台がありました。床がピカピカに磨かれていて鏡松がまた床に映っていました。秋光が効いていると思います。（洋子）

能舞台の伝統の重さを感じました。（うつぼ）

天国のかたちは野山冬日向　よし

特選　和田桃
並選　にこぐさ・洋子
選外　富野香衣

特選

教祖様が天国はこのようなところとつくられたという話この植物園や、松林など。美しいところです。いい話を掬いとりました。地（和田桃）

並選

信仰とは神の作ったものをありのままに受け止めるということでしょうか。野山のかたちに懐かしさを感じるのはそういうところからなのでしょうか。（にこぐさ）

教祖様が天国のような桃源郷を表すには自然の野山だとおっしゃったとのこと。天国のかたちと上手く表現されていると思います。（洋子）

選外

穏やかな死後の世界をイメージできます。（富野香衣）

内堀のテグスのもつれ冬隣　にこぐさ

特選　宮本こぼ
並選　よし・うつぼ
選外　へちま

特選

今日の最初の吟行場面　他に同じシーンの句がありましたが、これが一番（宮本こぼ）

並選

侘しい感じや冬の寒さが俳句からひしひしと伝わってきました。（よし）

解けないテグスの様にどうにもならないけど時は過ぎると感じました。（うつぼ）

選外

縺れと冬隣の季語が良い距離です（へちま）

石垣に刻印ありて冬ぬくし　不染

並選　富野香衣・へちま・泰干・川崎

並選

石垣の刻印に焦点を当て、そこから初冬の吟行へ繋げる「冬ぬくし」の季語が絶妙です。（富野香衣）

石のような冷たそうなものですが　人の手がかかっている温かさ（へちま）

自分の石、石垣の思い、、（川崎）

小春日のそつとのぞきし能舞台　にこぐさ

特選　泰干
並選　宮本こぼ・一途
選外　へちま

特選

個人の見学ではじっくり見るのだが団体での見学は遠慮がちに頭ごしで見る程度。そう興味のない能舞台となれば素通りしてしまう。小春日という季語が気候の良い日にリュック背負った団体がぞろぞろ来た雰囲気を感じて良かった。（泰干）

並選

これも沢山句ございましたが一番素直で良い　（宮本こぼ）

釣れずとも竿先遊ぶ小春かな　守彦

並選　秋霜・不染・和田桃・藤岡

並選

濠に親子連れが何組か、ほほえましい実景を切り取られた。　（秋霜）

ヘラブナを釣っていました。呆け防止に良いと言っていました。　（不染）

親子で釣りをしていました。釣れなくても楽しんでいる。　（和田桃）

まあ小春の暇人の釣りがよくかけてるなー　（藤岡）

3点句

枯れてなほ色つやつやと式部の実　秋霜

特選　うつぼ
並選　孝
選外　へちま

特選

「枯れてなほ」と言う所にいつまでも美しくあって欲しいとの思いを感じました。　（うつぼ）

並選

美しい紫がひかっていました　（孝）

選外

そうなんです　宝石の様です　（へちま）

弾圧の冷まじき地を祈りけり　和田桃

並選　孝・川崎・泰干

並選

弾圧を受けても　祈りで跳ね返している姿に感激です　（孝）

宗教の弾圧に耐え祈り、続けてる感じが、出てる　（川崎）

転用石数式無視の冬の城　宮本こぼ

特選　洋子
並選　疾風

特選

石垣を再興した際に石に印字があるものがあるとのこと。サインコサインタンジェントでは計算できないことを上手に読んでらっしゃるなと思います。　（洋子）

城濠の暗き水剪つ（きつ）鴨の群れ　一途

並選　よし・不染・太陽

並選

今日まず目に入ったのが鴨たちでした。暗き水という言葉とそれを剪って進む鴨という対比がいいです。　（よし）

暗き水剪つの措辞が上手い　（不染）

剪るじゃなく、剪つという馴染みのない初めて目にした言葉だが、これも詠みたかったワンシーンを見事に詠み切れている。　（太陽）

冬日陰鏡の間から覗く神　よし

特選　にこぐさ
並選　美也子
選外　へちま

特選

普段私達の立ち入る事のない鏡の間より舞台を見せていただきました。そこには厳かな気が静かに満ちていて見てはいけない物を見たような気持ちになりました。

（にこぐさ）

並選

能舞台の切戸から舞台を覗かせて貰った。もしかしたら神様も覗いていたかも知れない。

（美也子）

選外

神で終って居るのが惜しい　（へちま）

石垣を仄かに照らし残り菊　守彦

並選　へちま・秋霜・孝

並選

ひっそりと咲く野菊　小さいだけの温かさがあります

（へちま）

石垣を照らしていたのは、石蕗の花ばかりではなかった。

（秋霜）

仄かが良いですね

（孝）

天守なき濠に番（つがい）の鴨らしき　秋霜

並選　にこぐさ・宮本こぼ・うつぼ

並選

丹波亀山城を訪れた最初に出会ったのは大きめの鴨でした。私も番かなぁと思って眺めていました。

（にこぐさ）

番らしきがよい

（宮本こぼ）

仲の良い番の鴨のゆっくり泳ぐ姿が目に浮かびました。

（うつぼ）

廃城のあと冬枯れの山野草　和田桃

特選　川崎
並選　秋霜
選外　へちま

特選

冬枯れ、、廃城、これからの季節感が、いいかな、、、

（川崎）

並選

冬枯れではあったが、あまたの山野草に目を見張った。

（秋霜）

2点句

城跡の小砂利踏む音冬日和　守彦

並選　清史・孝
選外　石黒

並選

ザッザッザッと言う音　冬と城跡がきいてるように思いました

（孝）

鴨ゆたり光秀公の背中見て　洋子

並選　一途・和田桃

並選

南郷池の鴨　たぶん光秀像の背中ばかり顔はみたことないでしょう。

面白い発送で切り取って

（和田桃）

城跡（しろあと）の初冬下（はつふゆくだ）る丹波かな　疾風

並選　富野香衣・清史

並選

「初冬を下る」の措辞がまさに城跡の吟行にふさわしいと感じました。

（富野香衣）

城跡に黄を開きたる石蕗の花　石黒

並選　富野香衣・洋子

並選

石蕗の花の色を主役としてしっかり捉えています。（富野香衣）

植物園の石蕗の花の可憐な黄色が印象的でした。（洋子）

トンネルの切れ目に昼の紅葉かな　藤岡

特選　清史

特選

嵐山から保津峡を抜けて亀岡までの山陰本線はトンネルと橋が続き、トンネルの暗さを抜けたら昼の日差しの暖かさと紅葉が目に入ってくるイメージが伝わっていいと思う（清史）

冬日影零さぬやうに坐禅印　富野香衣

並選　秋霜・疾風

枯野にも赤い実青い実隠しおる　孝

特選　にこぐさ

特選

大本花明山植物園を散策させていただきました。花の盛りの過ぎたありのままの庭に冬苺や紫式部など所々にビーズが見え隠れした様子がとてもチャーミングでした。（にこぐさ）

石垣の蒼きを渡る初冬の音　一途

特選　富野香衣

特選

「石垣の蒼き」と「初冬の音」、色と音の取り合わせが素晴らしいと思います。また、間を繋ぐ「渡る」の措辞、無駄のない句の作りです。

明言しない句は、読み手の想像を膨らませていきます。（富野香衣）

幼子に釣りの指南や冬日和　和田桃

並選　泰干・うつぼ

選外　へちま

並選

雑水川のほとりを歩いていると親子らしき3人が釣りをしていた。かなり厳しいお父さんのようで幼い男の子に自分でするようにと言っていた。ところがウキの投げ方やリールの操作に関しては優しく指導されていた。そんな微笑ましい様子と冬日和の季語がピッタリあっている。（泰干）

親子で釣りにきてるのでしょうか？（うつぼ）

様々な野菊自由な場所に咲く　洋子

特選　和田桃

特選

色々な種類の野菊が自由に。植物園で守られながら自由とは。気取らない野菊の雰囲気がある　天（和田桃）

冬雲の晴れて五万石の城下　一途

並選　清史・川崎

並選

立派な、五万石、、城下（川崎）

1点句

城郭に植物の園冬も花　石黒

並選　美也子

並選

城趾に大きな植物園があって色々な草木があり少ないが花も咲いていた。冬も花が気に入った。（美也子）

神の留守俳人集い参拝す　石黒

並選　疾風
選外　和田桃

選外

神様がいま出雲にいっています。それでも俳人は、祈っています。（和田桃）

黄落の中を一両ローカル線　大美

並選　和田桃

並選

嵐山を入ると黄落の雰囲気の亀岡
一両ではなかったが、そんな雰囲気もあるかとも（和田桃）

松ぼくりてんでに転び昼寝かな　美也子

並選　藤岡

並選

賢治教徒としては団栗はみのがせない。松ぼっくりも仲間だ。松ぼっくりの昼寝、って絵本になりそう。（藤岡）

冬ざるや光秀の夢いま何処　不染

並選　川崎

並選

光秀の思いが、いつまでもかな、、（川崎）

スケッチも俳句も我流秋うらら　秋霜

並選　和田桃

並選

秋うらら楽しんで我流でいいです。勉強しすぎないように。（和田桃）

もののふは名を遺し螳螂枯るる　富野香衣

並選　和田桃

並選

歴史の武将。謀反の光秀　謀反の尊氏
かまきり　の挑戦的な雰囲気を掬いとって

います（和田桃）

一人(ひとり)ずつ石垣見上(みあ)ぐ冬の空　疾風

並選　孝

並選

説明を聞いて感動して見上げる仕草が上手い（孝）

雑水川水辺に映ゆる冬木立　泰干

並選　一途

並選

朝の第一印象を詠みあげられている。（一途）

しがらみを断ちて落葉の風まかせ　へちま

並選　石黒

並選

落ち葉が人生に例えられている様な風に感じました。（石黒）

冬ぬくし友ら大挙し吾街へ　へちま

並選　石黒

並選

へちま先生と思いますが、なにか喜びが感じられます。（石黒）

花ちぢれ冬がそこまで茶の木かな　泰干

並選　太陽

並選

詠みたいことが凄く伝わってきます。（太陽）

能楽堂神殿奥より秋の音の　藤岡

並選　川崎

並選

今にも踊りが見えるかな、、（川崎）

草生分けめんこい茸のひょっこりと　へちま

並選　太陽

並選

言葉も音も優しくて、なんか良いです。（太陽）

冬めくや丹波祇園の祭りあと　疾風

並選　清史

弾圧の跡地伺う枯野かな　泰干

並選　疾風

温室の羊水に満つ百花かな　宮本こぼ

並選　泰干
選外　富野香衣

選外

「温室の羊水」という比喩が素敵です。（富野香衣）

天守閣ありけむ彼方雁の棹　富野香衣

並選　一途

並選

ありし日の天守閣が偲ばれます。（一途）

冬晴れや一樹の朱より明くる城　疾風

並選　不染
選外　富野香衣

並選

表現が上手い。感服しました。（不染）

選外

吟行に参加していないので、「一樹の朱」の名前をよければ教えてください。（富野香衣）

拝殿に祝詞の響く冬座敷　泰干

並選　秋霜
選外　和田桃

並選

広い拝殿ゆえ、冬座敷が、ピッタリ。（秋霜）

選外

拝殿　冬座敷　似てるようなので、時効季語でまとめられたら（和田桃）

ジャンパーの乙女解説能舞台　へちま

並選　疾風

並選

ジャンパーと能舞台の対比からユーモアを醸し出しているところが面白い。（疾風）

石垣は苔むすままに実南天　秋霜

並選　疾風
選外　へちま

異議ありの貌して枯るるいぼりむし　富野香衣

並選　藤岡

並選

たしかに笑っているのを見たことがない。なんて頑迷な生き物だ！　（藤岡）

めだか釣るといふ子のいて冬浅し　美也子

並選　藤岡

並選

語感がすっきりするといいのに。
めだか釣るといふ子いてまだ冬
浅し　（藤岡）

初冬の城跡天正の刻印　石黒

並選　清史
選外　へちま

冬の夕猫に譲りし妻の膝　うつぼ

並選　美也子
選外　富野香衣

並選

愛猫に甘えられたら何でも許す飼主の姿が浮かんだ。　（美也子）

選外

まあ、なんて素敵関係性！　（富野香衣）

うどん湯気眼鏡曇りて冬めけり　清史

並選　宮本こぼ

並選

僕はマスクをしてメガネ曇りました、冬めきですね　（宮本こぼ）

吾亦紅母は弱音を吐かぬ人　秋霜

並選　富野香衣

並選

吟行の途中に見つけた吾亦紅なのか…そこからお母様への思いを綴っているのでしょうか。作者の内在する母親像を垣間見ることができました。「吾亦紅」の凛とした雰囲気もよいですね。　（富野香衣）

控えめの美人むらさき冬の庭　よし

並選　石黒

0点句

足元でふふむ吉祥（きっしょう）宇津田姫　よし

選外　富野香衣・和田桃

選外

「足元で」の助詞「で」
「足元に」
とするとどうでしょう。（私見です）　（富野香衣）

うつた姫　冬の季語ですね。
春は佐保姫　の冬の神　（和田桃）

公園で遊ぶ児の減る暮れの秋　大美

亀岡の聖地大本身に入むや　川崎

歴代閉ぢ苑に野菊の白や黄や　一途

チャの花花の終わりに冬近し　川崎

朝日さす堀にぷかぷか浮寝鳥　美也子

選外　富野香衣

選外

「ぷかぷか」、「浮かぶ」、どちらかに絞ったらどうでしょう。（富野香衣）

腐葉土の小径転がりし茸　太陽

紅葉（もみじ）に絡む子の釣り糸を解（ほぐ）す父　宮本こぼ

選外　へちま

選外

子を見守る親の存在が見えます（へちま）

おほもとの桃源郷や冬野原　洋子

初冬や素足に靴下履きにけり　清史

選外　富野香衣

選外

「素足」は夏の季語ですが、この句は靴下が勝っているでしょうか。ご意見をお聞かせください。（富野香衣）

初冬や万祥殿の陽の溜まり　不染

選外　へちま

選外

温かな日差しが　広い畳の間を和らげます（へちま）

昼告げる鐘の音響く街寒し　守彦

水すこし落葉の溝をながれゆく　藤岡

初冬や綿のズボンをウール地に　大美

花園のラガー頼もし幼顔　うつぼ

八階の迷ひこほろぎもう鳴かぬ　清史

お手植えの三代目なる大銀杏　美也子

赫（あかあか）ゝと燃ゆ有終を秋夕陽　大美

絶叫の弾圧痕（だんあつこん）や冬の虫　疾風

保津川の秋の水引く御苑かな　藤岡

そぞろ行く参道並ぶ白きのこ　孝

末枯やぼーっと電車に揺られをり　清史

大本の神の使えし秋ふかし　川崎

ハロウィンのお菓子半額神無月　清史

選外　富野香衣

選外

ハロウィンは季語として定着しつつありますね。（富野香衣）

立冬や鏡の間にもひとしきり　にこぐさ

萩の道通り大本山といふ　藤岡

丹波路を早く来い来い初紅葉　一途

吉祥草間引かれて尚眼の前に　へちま

お出掛けの　娘（こ）の帰り待つ夜寒かな　大美

小春日や夢を紡ぎし天恩郷　不染

枯葉は枝に釣りの浮きは動かず　太陽

光秀像凛々し紅葉の散りし　太陽

磨かれし窓庭一面の枯葉　太陽

石積みに実のころころと油桐　守彦

俳句会亀岡の地に秋の空　川崎

玉眼の潤む初冬「南無阿弥陀」　宮本こぼ

控えめな細き花弁や冬の菊　石黒

枯草や石積のぼり天を突く　泰干

穭田を各停電車のんびりと　孝

湯たんぽや微睡（まどろ）み誘う足の先　うつぼ

膝枕小春日和の耳掃除　うつぼ

冬うらら父は子に釣り教えたり　洋子

初孫の兆しも見えぬ初冬かな　うつぼ

餌の様松ぼっくりの広がりて　孝

汽車降りて冬の亀岡深まりて　川崎

選外　へちま・富野香衣

選外

「～りて」のリフレインがリズムを作っています。（富野香衣）

小春なり小安石のかかと程　にこぐさ

総評

１１０句、読み応えがありました！

吟行での風景が参加していない私にも見えてきました。

句評に少し私見を入れました。ご意見をお待ちしていますね。

気をつけてお帰りください。（富野香衣）